令和５年度「米原市学力状況調査」の結果について

１　調査の概要

（１）調査の目的

米原市では、児童生徒の基礎的・基本的な学習内容の定着を図るため、平成 17 年度から学力状況調査を実施している。

この調査は、学習内容の理解度を測る「教科学力」とともに、その背景となる「学習意識」も客観的に調査し、米原市の児童の学ぶ力の実態を多面的に把握するものである。

そして、その結果を分析し、各学校の実態に応じた授業改善へとつなげていく。さらに、学校が児童生徒一人ひとりの学習定着状況を把握し、的確な個別指導を行うための一助とする。

（２）調査の対象および内容

・調査対象　…　小学校第４学年（市内９校）329 人

・調査内容　…　標準学力調査　国語・算数の２教科（各 40 分）

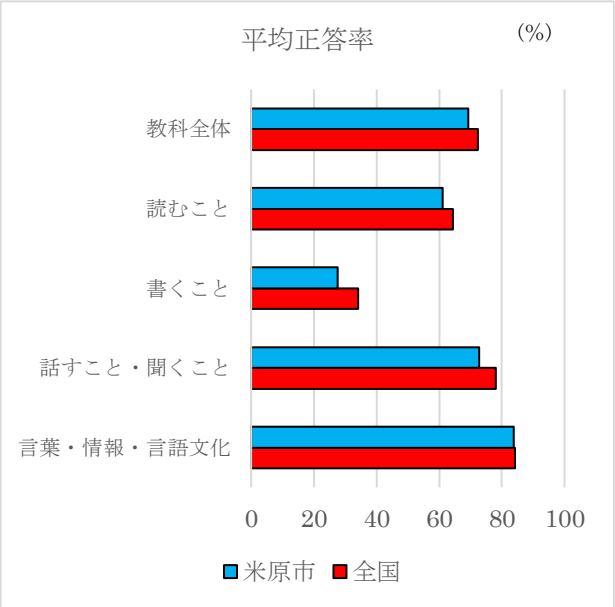
意識調査　　「学びの基礎力」「社会的実践力」「学級力」「家庭学習力」「米原市独自の質問」（45 分程度）

・調査期日　…　令和５年５月２９日（月）～６月２日（金）のうち各校が定めた日

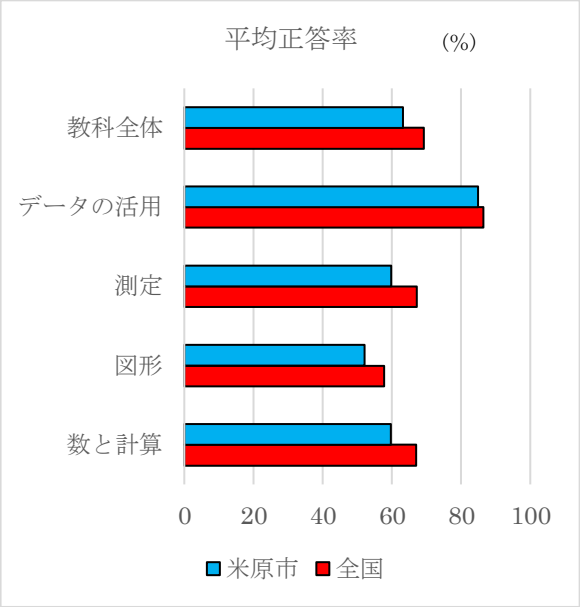
２　標準学力調査の結果

（１）標準学力調査の平均正答率

【国語】



【算数】



国語は、全国平均をやや下回っている。すべての領域で下回っているが、特に、「書くこと」の領域での差が大きく、課題があるといえる。

算数は、全国平均を下回っている。すべての領域で全国平均を下回り、特に「数と計算」「測定」の領域に課題があるといえる。

（２）全国正答率と比較して差が大きい問題

【国語】大問１―４「聞くこと」５－２「言葉の特徴と使い方」

作文の下書き

わたしたちは、社会科見学で、町の「農さん物加工センター」に行きました。そこでは、地元でとれた野さいやくだもので、つけ物やジャムを作っています。わたしは、つけ物やジャムが、ていねいに手作りされているのを見て、とても感心しました。

つけ物にしお、ジャムにさとうをたくさん使うと、食べ物がいたみにくくなるのだそうです。それで、野さいやくだものを(あ)長い間ほぞんできるようになるのです。わたしは、そのことをはじめて知って、とてもおどろきました。

なぜつけ物やジャムを作っているのかも聞きました。長い間ほぞんできるものにすることで、野さいやくだものが、むだにならないのです。

(2) ――線(あ)「長い」という言葉と反対の意味の言葉を、次の1～4から一つえらび、かい答用紙の番号に○をつけましょう。

1 ひくい　2 せまい　3 短い　4 太い

(4) 森山さんの発表のしかたはどのようにくふうされていますか。次の1～4から一つえらび、かい答用紙の番号に○をつけましょう。

1 自分の考えについて、自分の体けんをもとにして話している。

2 ほかの人から聞いたことを、いくつか引用して話している。

3 二つの出来事をくらべて、ちがいをわかりやすくつたえている。

4 自分の思いを中心に話し、ときどき聞き手に問いかけている。

【算数】大問１－１－ウ「整数の計算」

1 次の問題に答えましょう。

(1) 次の計算をしましょう。

ウ 204 × 18

３　意識調査の結果

（１）意識調査の平均スコア

①「平均スコア」とは

各質問の回答内容を望ましい回答内容にウエイトを置く形で数値化し，集団の学習意識の傾向をつかみやすくしたものです。４択の質問を対象に、各選択肢に次の配点で得点を与え、カテゴリー毎に算出した平均値に 25 を掛けた値。

最も望ましい／良好な選択肢（強い肯定）	に「配点：３」
次に望ましい／良好な選択肢（弱い肯定）	に「配点：２」
改善／配慮を要する選択肢（弱い否定）	に「配点：１」
特に改善／配慮を要する選択肢（強い否定）	に「配点：０」

② カテゴリー分類

Ⅰ 学びの基礎力 ⇒『豊かな基礎体験』…「基礎体験」「基本的生活習慣」

⇒『学びに向かう力』…「感じ取る力」「学習動機」「自己責任」「自己有能感」「達成感」

⇒『自ら学ぶ力』…「学習スキル」「学習定義のための方略」「学習計画力」

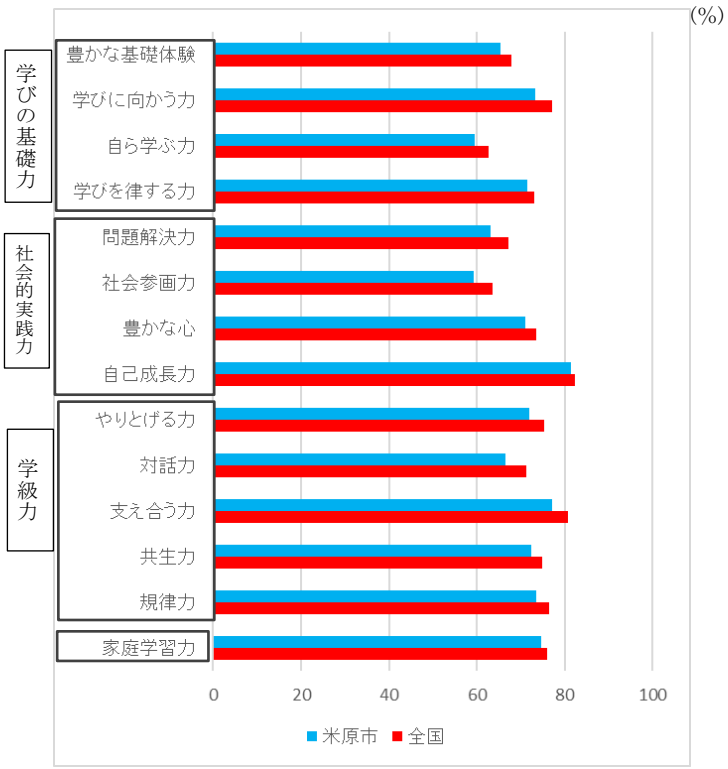
⇒『学びを律する力』…「学習継続力」「学習のけじめ」「学習環境の整備」「授業を受ける姿勢」

Ⅱ 社会的実践力 ⇒「問題解決力」「社会参画力」「豊かな心」「自己成長力」

Ⅲ 学級力 ⇒「やりとげる力」「対話力」「支え合う力」「共生力」「規律力」

Ⅳ 家庭学習力

③ 小学校第４学年の平均スコア



・最も平均スコアが高い質問

「朝食は毎日食べている。」96.2

「学習して身につけた知識は、いずれ仕事や生活の中で役に立つと思う。」93.7

・最も平均スコアが低い質問

「新聞に書かれていることについて家の人と話をする。」22.1

・全国と比較して平均スコアが高い質問

「社会の授業で、調べたことを、新聞形式でまとめたことがある。」70.3(+11.4) 「社会の授業で、テレビや電子黒板などを使って、写真や地図・グラフなどを見ることがある。」81.6(+8.0)

・全国と比較して平均スコアが低い質問

「放課後や土曜日などに、学校の活動や集まりがあれば、参加している。」34.6(−14.2) 「ふだんから「不思議だな」「なぜだろう」と感じることがある。52.7(−14.0)

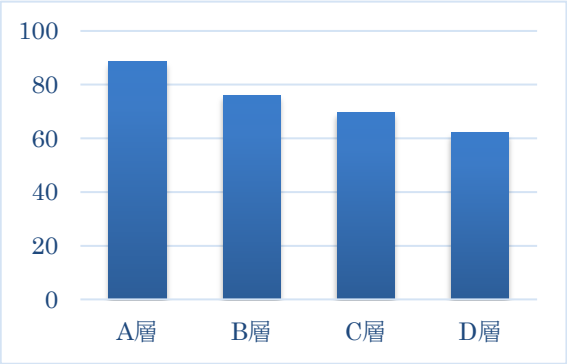
全国平均と比較すると、全体的にやや下回る。「自己成長力」の値が８割を超え、良好である。一方、「社会参画力」の低さや「対話力」に課題が見られる。「対話力」には「友だちの話に賛成・反対・つけたしと、つなげるように発言している。」や「話し合いのとき、考えや意見を進んで出している。」などがある。GIGA 端末を用いて、自分の考えや意見を示したり、提示されたさまざまな意見の中から自分の意見と比べたり、深めたりする学習が必要である。また、子どもが主体的に学習に取り組むための工夫が必要である。課題は与えられるものではなく、自ら進んで課題に気づき、協働しながら解決していくような学習展開にしていかなければならない。

（２）学力調査結果とのクロス集計

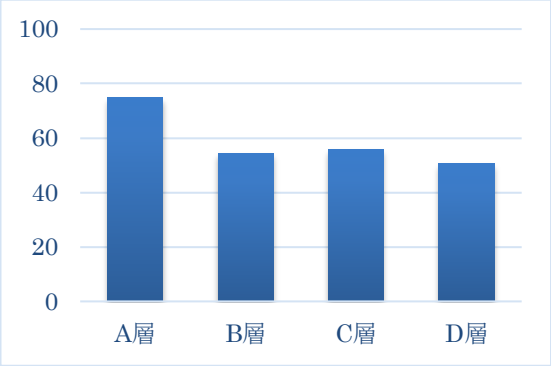
※児童･生徒を標準学力調査の受検教科平均正答率で 4 等分し 、上から A 層、B 層、C 層、D 層と分けています。

① 学びの基礎力

「ゲーム機やケータイ、スマートフォンでゲームをするときは、家の人と時間についてルールを決めている。」

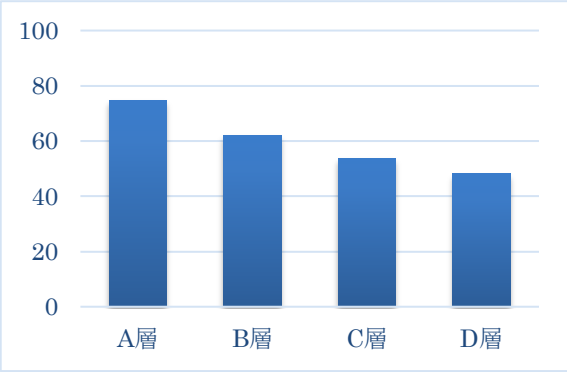


「本や新聞を読んでいる。」

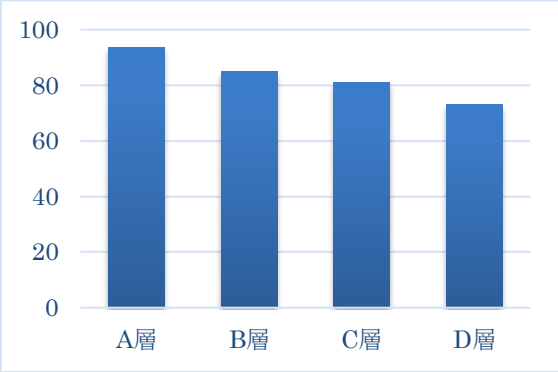


② 学習方略

「算数･数学の授業で、文章や式、図や表などを組み合わせて自分の考えを説明したことがある。

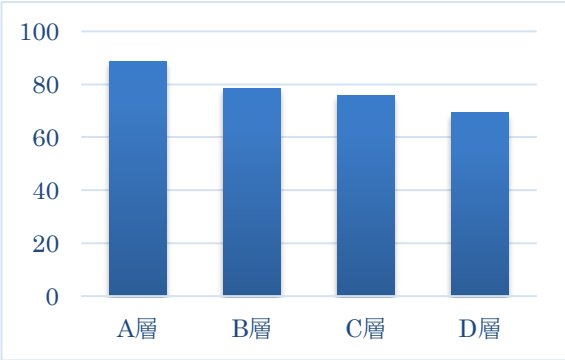


理科の授業で、テレビや電子黒板を使って、実験や観察のようすや自然のいろいろなようすなどについて、写真や映像で見ることがある。

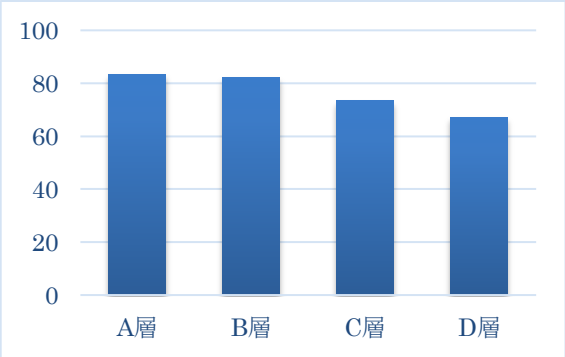


③ 社会的実践力

自分には、先生や友だちからほめられるような得意なことがある。



自分がやらなければならないことは、責任を持ってやり抜くことができる。



学びの基礎力のカテゴリーでは、ゲームをするときの時間のルールを家の人と決めていると答える児童ほど、学力が高い傾向が見られる。また本や新聞を読んでいると答える児童ほど、学力が高い傾向が見られる。
学習方略のカテゴリーでは、自分の考えを説明したり、気づいたことや新しい疑問などについて話し合ったりまとめたりしていると答える児童ほど、学力が高い傾向が見られる。
社会的実践力のカテゴリーでは、得意なことがある、やらなければならないことを責任をもってやり抜くことができると答える児童ほど、学力が高い傾向が見られる。

４　考察

今回の学力調査では、国語・算数ともに全国平均を下回り、課題が見られた。その要因として、国語では、特に「書くこと」（文章を書く問題）と「話すこと・聞くこと」に苦手意識が見られることから、改善策として、まずは自分の考えや思いを書き、それをもとに友だちに話したり、聞いたりする活動に重点を置いて取り組むことが考えられる。国語科だけでなく、総合的な学習の時間や他の教科においても、それらの活動を仕組むことができる。GIGA 端末を活用したスピーチやプレゼンテーションなど、「やってみたい」という主体的な思いを大切にしながら、情報収集し、考えを広げたり深めたりすることで、「話したい、伝えたい」という思いを高めることが重要である。算数では、特に「数と計算」や「測定」をはじめ、基礎的な学力が定着していないことから、改善策として、１０分間のモジュール学習やドリル教材などを活用した持続的な反復練習や、AI ドリルの活用が考えられる。「測定」では、子どもの量感を育むことが大切である。具体物を用いたり、実際に距離を歩いたりして、体験的な活動を通して、実感を伴った理解が必要である。

また、４層分析により、学力層を上位から順に２５％ずつ，４層（Ａ－Ｄ層）に分けてＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ層間のどこに差が生じているか等に着目すると、Ｃ－Ｄ層の差が，Ａ－Ｂ層・Ｂ－Ｃ層の差より大きいことがわかる。つまり、一部の児童の学力が未定着であるため，該当の内容の理解の前提となる基礎的・基本的な知識・技能にさかのぼった個別指導を行うことが有効だと推察される。さらに、応用・記述式・活用の問題については、多くの児童に課題がみられるため、集団全体に対する指導が必要である。

５　学力向上の策定について

今後も学校では、児童理解につとめるとともに、子ども一人一人に合わせた支援を行っていきたい。また、市内各小中学校においても、各校独自の分析や課題改善に向けた学ぶ力向上策を策定し、具体的な取組と検証を進めていく。

社会的実践力のカテゴリーにおいて、「自分には、先生や友だちからほめられるような得意なことがある。」「自分がやらなければならないことは、責任を持ってやり抜くことができる。」という設問に肯定的な回答をした児童ほど学力が高い傾向が見られたことから、米原市が大切にしている自己肯定感・自己有用感と学力との相関関係があることが分かった。他にも、「みんなで決めた学級目標に力を合わせて取り組んでいる。」「係活動や当番の活動に責任をもって取り組んでいる。」などの設問に肯定的に答えている児童は高い学力を示す傾向が見られる。学級の中の自分の役割を責任をもって果たし、お互いに認め合うことで自己肯定感や自己有用感は相互に高まっていく。児童一人ひとりが学級に安心感を抱きながら、学習に取り組むことができるようにすることが大切である。

さらに、家庭での生活・学習習慣のますますの定着を目指して、学校と家庭がしっかりと連携していきたい。特に、クロス集計で学力との相関が見られた、「家で学習するときは、苦手な教科もしっかりと学習している。」「テレビやラジオをつけないで集中して学習している。」等の指導を家庭や地域にも周知し、学校と両輪で児童を支援し続けることが肝要である。学校でも家庭でも児童が充実感を得られる経験を増やすとともに、児童一人ひとりが夢や志を抱き、子どもたちが自分の未来を自分でつかむ力の醸成を目指していきたい。